

たかがかゆみ，されどかゆみ

高橋 直子*

2019 年の国際腎臓学会において，SONG-HD (Standardised Outcomes in Nephrology－Hemodialysis：腎臓学における標準評価項目－血液透析) が提唱された。臨床研究で重視される評価項目は死亡や心血管疾患である一方，患者が自らの治療において重要視するのは，疲労感，旅行する能力，透析のない時間，家族・友人への影響，働く能力であることが明らかとなった。これを契機に，臨床研究や治療の目的を「医学的な成績」ではなく，「患者にとって価値のあるアウトカム (patient-reported outcome；PRO)」とする，患者中心 (patient-oriented) の透析医療を目指す取り組みが始まった。SONG-HD では，疲労感・心血管疾患・バスキュラーアクセス・死亡を中核評価項目 (最も重要な治療目標) とし，次いで中間層評価項目 (より重要な治療目標)，外殻評価項目 (重要な治療目標) を設定している。

かゆみは SONG-HD において外殻評価項目に位置づけられ，「痛みほど重視されないこのかゆみ」と患者川柳に詠まれているように，中間層評価項目である痛みより軽視されがちである。しかし，強いかゆみは睡眠障害やうつ状態を介して生命予後を不良にする重要な PRO である。これまで，血液透析患者におけるかゆみの有病率は 60～80%，中等度以上の強いかゆみは約 40% と世界的に報告されてきた。一方，わが国では血液浄化器の性能向上，超純水透析液を用いたオンライン HDF の普及， κ オピオイド

* 大町土谷クリニック

受容体作動薬の上市など，治療選択肢の拡大と治療水準の向上により，かゆみの頻度や程度は改善傾向にあると考えられる。

そこで筆者らは，2022 年 11 月下旬から 12 月にかけて，インターネットを利用したアンケート調査を実施し，日本の血液透析患者 485 名から回答を得た¹⁾。調査では，かゆみの有無や程度，QOL への影響などを評価した。その結果，378 名（77.9 %）がかゆみを経験しており，うち日中 101 名（26.7 %），夜間 78 名（20.6 %）が中等度以上のかゆみを訴えていた。日中または夜間に中等度以上のかゆみを有する 119 名のうち，約 7 割が QOL への悪影響を感じており，32 名（26.9 %）は未治療であった。また，かゆみを有する 378 名のうち，未治療の「かくれたかゆみ」患者は 82 名（21.7 %）存在した。この結果から，かゆみの程度は改善傾向にあるものの，依然として多くの患者を悩ませていることが明らかになった。

医療従事者には，日常的に積極的かつ継続的な問診を通じてかゆみを評価し，情報提供を行うことで，患者の状態に応じた適切な治療へ結びつけていただきたいと願ってやまない。

文 献

- 1) 高橋直子，吉澤 拓：透析皮膚癢痒症の実態について－インターネットを介したアンケート調査報告．透析会誌 2024；57：111-122